

大飯原発配管の傷 「溶接の熱が原因」

関西電力は二十四日、定期検査中の大飯原発3号機（おおい町）の配管溶接部で見つかった傷について、溶接時の熱によって配管が硬くなったことが原因でひび割れが発生、進展したとする調査結果を発表した。関電は配管を取り換える方針で、運転再開時期は見通せない。同日開かれた原子力規制委員会の会合で説明した。溶接は一九九〇年四月、経過年数約二十年と二年の溶接士二人が現場で行ったといい、関電の担当者

側から抽出や点検方法に異論が出て、引き続き検討することになった。傷が見つかったのは蒸気発生器周辺で分岐する配管。配管の厚さ十四ミリア対し、深さは内側から最大四・六ミリアだった。大飯3号機と同じ加圧水型軽水炉では、国内で過去に同様の事例はなかった。

原発処理水処分 方針決定越年へ

経産省

は「技術指導をしながらの溶接のため速度が遅くなり、配管に加わる熱が大きくなった可能性がある」とした。

また関電は、稼働を予定する美浜、大飯、高浜の三原発七基で、同様の傷が発生する可能性のある二百七十カ所を抽出し、今後の定期検査を通じて順次点検するとした。しかし、規制委

東京電力福島第一原発の処理水の処分について、経産省は二十四日、方針決定が年明け以降になる可能性が高いと明らかにした。政府として海洋放出を検討し、漁業者など影響を受ける関係者らとの調整を進めているが、さらに時間が必要と判断したとみられる。第一原発の状況に関する記者説明で経産省担当者が「年内の方針決定は厳しい」と述べた。